

## PART 3 新しい仕事、広がっていく仕事

### 1. 聞こえない理学療法士として



松澤可帆 聴覚障害をもつ医療従事者の会(聴同連)

#### 理学療法士の仕事

私は、静岡県介護老人保健施設で理学療法士として働いています。

理学療法士とは、朝寝やケガなどによって歩行困難となった方や、階段動作やトイレ動作、入浴動作など日常の中で必要な動作が難しくなった方をはじめとする身体機能の障害がある方を対象に、リハビリをして基本的な動作の獲得・回復を図っていく仕事です。

介護老人保健施設は介護認定を受けた高齢者を対象とした施設で、朝寝や障害の復旧、生活の自立度などもさまざまな方々があります。施設でのリハビリは病院とは異なり、慢性期または維持期といわれ、発症してから時間が経っている状態の回復が見込めない方も多く、現在の状態を維持することさえ困難な方が少な

くありません。それでも、可能な限り自宅へ戻るために必要なことを支援し、ご本人、ご家族に寄り添ったリハビリを心がけています。

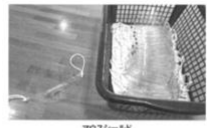
#### 理学療法士を目指した理由と資格取得

私が理学療法士を目指したのは、私の中に「耳が聞こえないけれど、今まで私が周りの方々に支えられてきた分、今度は私が人を助ける仕事に就きたい」という思いがあったからです。高校1年の時に、保健師を仕事としていた母が理学療法士という職業を教えてくださいました。その後、高校2年の時、通所リハビリ施設で現場実習をさせていただき、間近で理学療法士の仕事を見させていただきました。そこにいた利用者さんが明るく、楽しく運動をしている姿を見て、自分もこのように一緒に運動して利用者さん

#### 聴覚障害者の仕事

を明るくしていきたいと思い、理学療法士を目指しました。

理学療法士を目指すにあたって、専門学校や大学へ通う必要がありましたが、希望する専門学校の理学療法科の先生から通常の学生でさえ進級が難しい学習に重度の難関ではついていけないのではないかと受験することさえも断られそうになりました。しかし、親と一緒にオープンキャンパスや授業体験、面談に何回も行きました。すると、専門学校の担任となる先生も納得してくれ、周りの皆さんの協力あって、無事に受験することができました。入学後は、担任の先生をはじめとした先生方のサポートを受けながら、同級生たちも助けてもらい、受け入れてくれた実習先の先生方の支援を受けて、無事に卒業し国家試験に合格することができました。



マウスシールド

そんな理解がある職場でも、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、マスクが当たり前になったことでコミュニケーションが難しくなりました。職員の皆さんは、私と話すときにはなるべくマスクを外していただいているのですが、忘れてしまう方もいて何回か聞き返したり、外すことをお願ひする必要があり、申し訳ない気持ちにもなります。しかし、現在は透明マスクの販売もあり、上司や先輩はミーティングや会議等長時間の会話が必要な場面は透明マスクを使用してください。入所している方の場合には外出や家族との面会以外で、施設内で過ごすときにマスクをするかしないかはその方の自由で、マスクをしていない方が多く、お話しすることは困難なく行えています。マスクをしている方も、外していただくようお願いしています。ただ、通所リハビリの方とは、施設の外から来ているためにマスクが必須です。感染症が流行し始めた頃は、私と話すときはマスクを外していただいていたのですが、感染リスクがあるために、上司からマウスシールドの提案があり、職場で購入していただきました。それからは、リハビリの時にマウスシールドをつけていただき、コミュニケーションをとっています。居宅ケアマネなど外部の方々とも話をするのですが、マスクを外していただく、または施設内の他の職員を介して連絡

#### 職場の様子

現在の職場には、卒業と同時に就職しましたが、聴覚障害があることを受け入れていただき、上司や先輩のサポートを得ながら仕事をしています。職場でのコミュニケーションは、口話・読唇術が主で、分からないことは筆談やメモなど書面のやり取りで対応していただいています。利用者さんとも、読唇術や身振り手振りでコミュニケーションをとっています。反対に、利用者さんの中には高齢で耳が悪い方もいて、こちらが筆談で対応することもありますが、中には読唇術の難しい利用者さんもありますが、事前に書面情報で読唇術が難しい方と分かる場合は、上司や先輩が担当にならないように配慮してくれます。知らずに担当を受け持った場合でも、すぐに上司や先輩に相談することで担当変更をしてくれます。

を取らせていただくことで対応しています。

理学療法士という仕事は、コミュニケーションや多職種連携が重要な仕事ですが、現在勤めている介護施設での利用者さんとは1対1での対応がほとんどで、利用者さんから重要な情報があった場合には介護士へ伝え、再度確認していただくなど二重確認で対応しています。多職種連携に対しても、担当が決まっていることと書面でのやりとりの時もあるため、大きな困難には至っていません。しかし、

それでも情報漏れや情報の食い違いが出てしまうこともあるため、気づいた時点で修正できるように気を付けています。

現在、新型コロナウイルス感染症の流行でコミュニケーションの困難の壁が大きく、聴覚障害者にとって生きづらい世の中です。感染症が早く収束することとともに、透明マスクやフェイスシールド、音声文字変換機器など聴覚障害者にとってのコミュニケーションツールがより多く制作・拡散されることを願っています。

#### 聴覚障害者の仕事